

明治大学社会科学研究所紀要市場原理導入と農家経営の「家計と経営の分離」思考の胎頭
ードイツ農業史における「全き家」の基盤崩壊の推移を例としてー

浅 野 幸 雄☆

The historical consideration of the separate accounting
entity on the farm family in Germany

Asano Yukio

1. はじめに ー問題の提起と限定ー

農業は本質的に地理的な行為であり、地域の習慣や文化にも深く根ざしている。今日の資本主義経済にあつて科学技術の進展の中で農業分野も、質から量へ、経営規模の拡大、合目的な管理の視点などから個別経営の純収益を稼得する体制も、その編成替えを余儀なくされてきている。農業経営体の育成を目指す新農政は、「農家経営」から、創意工夫によって自立した合理的経営としての家族農業経営の活性化、農業経営の法人化を推進する「経営体」の認識を強調してきている¹⁾。自立的な農業経営が、近代化における新しい条件のもとで経営組織の再編を図ることが背景にある。もとより、農業者は経済原則だけでものを考えたり、生活水準や所得だけから人生の価値を図っているわけでもない。農場での生活や創造のために、低い生活水準や多くの労働要求など幾多の不利を甘受する農民は多いのである²⁾。

市場経済システムに基づく資本主義経済制度は、競争原理を奨励することで成り立ち、自己の利益へと志向する。農業法人化の前段として経営管理機能が増長され、専門化された経営職能が求められている。農業法人が克服すべき課題が山積みされている。とくに情報戦略と資金調達、その管理運営は異業種交流を通じたネットワークづくりが要請されている。農業分野にも市場媒介システムを通じて家計維持の糧は得られなければならない。近代社会では生計維持のファン্ডを得る行為と、生命の再生産や労働力回復などの私生活とが完全に分離しているが、経済が市場法則に従っているので、農業者も私生活と切り離して考えなければならなくなっている。この意志決定は農業生産に従事する者の経済主体の意志に基づくものなのである。

☆農学部教授

¹⁾ 1999年6月制定の『食料・農業・農村基本法』の第22条で「家族農業経営の活性化」と「農業経営の法人化」を推進することを強調している。

²⁾ G. ブローム著 都筑利夫訳『農業経営学総論』家の光協会、51p、1972年(Blohm, G., Allgemeine landwirtschaftliche Betriebslehre, 1959, Stuttgart)

ドイツでは農民が自分の「経済」という場合、彼は自己の家政＝農業活動の全複合体を浮かべており、そこに住む人々、すなわち主婦と一緒に働いている家族も一体として認識しているが³⁾、その上で自立経営 (vollerwerbsbetriebs) を組織している。わが国の農家経営では、自由競争の流れの中で規制緩和、市場開放の波に翻弄されている。家計と経営の区分について、まだ理論的根拠を十分に持たずに農業者の稼得する所得は、自家労働からの所得と投下資本からの所得が混合して構成されている実情にある。この分離には会計技術上の理解が欠かせない。近年、ドイツ農業経営における個別農業の管理システムも情報技術の高度な変革の中で、農業団体連合は、農企業が規模の大小問わず経営成果に対する迅速な解答を掌握して、合理的な判断に対処できるよう、指導に当たっている⁴⁾。

本論では新農政の求める「経営体」の認識を鮮明にさせるため、家族経営が最も卓越した農業経営形態とされるなかで、家計維持の消費生活と生産経済の経営の分離について、ドイツ農業の発展過程の中で、一戸一法人、藁人形 (Strohmannsgründung) など農業における法人格論争以前の経緯を踏まえて、中世の家計と経営の未分化の「全き家」意識から近代のその分化過程を浮き彫りにしたく思うのである⁵⁾。

2. ドイツ農家経済と未分化の「全き家」意識

1) ドイツ農家のジッペ、ゲヴァンと私的所有について

ゲルマン民族は、今日のバルト海の周辺に、牧畜を主として生活を送っていた。ドイツ中央部には、森林に覆われた山脈、肥沃な溪谷などが張りめぐらし、北ドイツの起伏の少ない地域でも、肥沃なベールデという丘陵地帯がある。北西部には、海岸沿いに低湿地帯が広がり牧畜業に適している⁶⁾。ゲルマン人は、牧畜の優越と開墾技術の未発達のため、広大な農地を必要とし、多少とも長い定住期を持ち、遅々とした移動の生活を送ったものとみられる。ゲルマン的共同体では、固有の家と耕地について個人の所有が成立し、これを「個体的所有」individuelles Eigentumと規定している。したがって、ゲルマン的共同体では「経済的な完全体」である個人の家があり、私的個人としての自己形成をもっていた⁷⁾。

古代のゲルマン人は、耕地仲間たちで農民的平等性の思想が支配しており、ドイツのフーフエ (Hufe) はこの思想から生まれたものである。ドイツ人の定住したすべての地方に特徴的にあらわれているが、耕地を四角形ゲヴァン (Gewanne) に区分し、村落仲間の平等な持分地を分与されている⁸⁾。ゲルマン民族が住み着いた当時、農民グループはいずれもその土地をこのゲヴァンと呼ばれる比較的に大きな地片に分割し、仕事における持分としている⁹⁾。彼らの間では個々人による財産の自由処分は行わ

³⁾ オットー・ブルナー著、石井紫郎・石川武・小倉欣一・成瀬治・平城照介・村上淳一・山田欣吾共訳『ヨーロッパその歴史と精神』155p 岩波書店 1974 年 (Neue Wege Der Verfassungen und Sozialgeschichte Zweite, vermehrte Auflage von Otto Brunner, Göttingen)

⁴⁾ Michal Huith/Gabriele Sicher und andre : Betriebsmanagement für Landwirte, 1997, S. 5, Verlags Union Agrar.

⁵⁾ 津谷好人著『戦後西ドイツにおける農民経営の展開』66p、椎名重明編『ファミリーファームの比較史研究』お茶の水書房 1987 年

⁶⁾ ピエール・ジョルジュ著 本岡武・山本修共訳『世界の農業地理』白水社、83～4、1956 年 (Pierre George : GEOGRAPHIE AGRICOLE DU MONDE, QUE SAIS-JE? N212)

⁷⁾ マルクス・エンゲルス著大内力編訳『農業論集』1973 年岩波書店 104～9p

⁸⁾ 瀬原義生著『ドイツ中世農民史の研究』未来社 31～7p 1988 年参照、エンゲルス著戸原四郎訳『家族・私有財産・国家の起源』岩波書店 177p 1965 年 F, Engels : Der Ursprung der Familie, des Privat-eigentums und des Staats, 1891)

⁹⁾ W. アーベル著 三橋時雄・中村勝訳『ドイツ農業発展の三段階』未来社、15～6 (W. A. , Die Drei Epochen der Deutschen Agrargeschichte,

れず、家共同体（家が絶えればジッペSippe、氏族共同体）が財産を相続するのが一般的であった¹⁰⁾。ジッペという形式の家族は、血縁の絆のみによって結ばれている。だが、ある程度は集団としての自覚や集団への帰属感が前提されている状態であった。

マルク (Mark) とは本来、古ゲルマン社会で諸部族相互の間に介在した森林・荒蕪地 (マルカ) のことで、これは個々の家族ではなく共同で利用されたが、この主体ないし機関がマルク共同体である。これは、農耕段階に進化したときに生じた集団的安住の単位であって、これが土地を共同で所有し耕作したのであり、この共同体関係は中世を通じて近代に至るまで残存した¹¹⁾。大所帯家族の基準は住居と経済の共有だが、むしろ家組織全体が、生活共同体、経済共同体として考えられていて、血縁関係のない奉公人もこれに含まれることがある。この組織を経済的、法的に代表するのが「家父」である。ドイツ中世、近世を通じて支配的な家族形態だった¹²⁾。家長は、家族員の身体と生活についての権力を賦与する親族法的な保護力 (familienrechtliche Schutzgewalt) を行使したが、財産に対しては、ある種の財産管理権が彼に帰属した。土地は、家族の土 (terra familiae) として、したがって家族に帰属するものとして把握され、家族の土は家族の生計にとって必要な、彼らの家族の労働力に対応した土地とその利用権の総計を意味した¹³⁾。

2) ドイツ農家生活と「全き家」意識

中世では人口の8割近くが農民であり、貴族の生活様式は大農の生活様式の拡大にすぎなかった。牧畜の生殖を自己の管理化に置き、管理をより強化してゆく世代を越えた連続的な過程が家畜化であるが、その牧畜社会では、ともに手分けし、それぞれ自分の管理する家畜群に責任を持ち、拡散的にして、自立的共存が牧畜社会における家族の姿である。ドイツ各地の農民は、農耕社会、狩猟遊牧社会であろうと大家族制度のもとでは家父長権は非常に強い。家父だけがその居住者にかわって共同体の政治的権利を行使できるといった、家父権限は、そのような意味での家概念に由来している。

ヨーロッパ人は、家畜の労働力を徹底的に利用しながら、生活の余裕を生み出した。家族の機能は、その形態同様、時代や文化によってさまざまであるが、ある時には家族は経済的生産単位であった。家族が住むところの家という概念が、家父の指導の下で生活し、働く農業経済においてであった。家族とは、日常的に共同住居と経済生活の共同をしている夫婦、親子等の親族を中心とした集団であると、考えられているが、家族の範囲は主観的、心理的な領域の問題である¹⁴⁾。ヨーロッパ的人間の原形は、ヨーロッパが中世封建制として成立してきたので、ゲルマン的共同体は固有な個体的所有者である。ヨーロッパ中世の成立が古代ローマの生活様式を継承し、ローマ的共同体に固有な「私的所有者」の性格を包摂している。一方でヨーロッパ人の共同体意識は個人、家族、都市、国家、そしてE

1964, Hannover.)

¹⁰⁾ I・W ケラーマン著 鳥光美緒子訳『ドイツの家族』勁草書房 8～10p 1991年 (DIE DEUTSCH FAMILIE by Ingeborg Weber-Kellermann 1974)

¹¹⁾ 秋草実著『西洋中世大土地所有制度成立史論』法律文化社 295～7p

¹²⁾ マックス・ウェーバー著、上原専緑・増田四郎監修、渡辺金一・弓削達共訳『マックス・ウェーバー古典社会経済史』364p 東洋経済新報社、1959年 (Max Weber., Agrarverhältnisse im Altertum 1909)

¹³⁾ W.アーベル著 前掲書、39p

¹⁴⁾ 椋川一郎著『ドイツの都市と農村』吉川弘文館 247～8p、1988年

U共同体へと次々と段階を踏んで開放的に拡大してきたといえる。

古代ゲルマンにおいて人々の絆の中核を形成したジッペ、そして近代における子供中心の親密圏としての市民家族の誕生から、そのような近代家族そのものが揺らぎ始めている現代へ、情緒や愛情といった今日的な家族概念は二百年の歴史にすぎない。ゲルマン人の間に相続に関する新しい観念が生まれたのは、彼らがキリスト教へ改宗した結果であろう。ドイツでは17・8世紀に「家父の書」や「篤農訓」の類の、所領経営や家庭教育、家族道徳を含め理念化された広義の家政の書が多数現われた。19世紀ドイツの歴史家で民族学者であったリール (W・H、Riehl) は「全き家genzes Haus」と呼んだ。この「全き家」は、農業的生活世界の総体であり、ここでは家長 (家父) が家構成員 (家族、奉公人、従属民) に対する支配権、懲戒権をもつのである。ブルンナー (O・Brunner) は「家計と経営の未分化な社会生活の基本形態」としての「全き家」の概念を広げようとした¹⁵⁾。その「全き家」が、西洋社会の基礎をなす構造原理として解明され、その淵源は、勤勉の意義を説いたヘシオドス、クセノフォンそしてアリストテレスに至る連続線をたどることができる¹⁶⁾。そして家父が、ルッターによると、家族構成員に無制限の支配を行使し、社会倫理の中心的存在になってくる。

家と経済は必然的に支配の要素を含んでいる。全面的に主人の家計で給養されるとされるクセノフオンの「家政学」 (Oikonomikos) によれば家長の最も重要な資質である¹⁷⁾。ヨハンコーラーの「農業と家政」は家の主人は慎み深く治めることを心得よ、とする。ルッター主義に着色された近世家政論すなわち「全き家」には、新しい特徴が見られた。それはキリスト教的家政として、家に特別の宗教的教育機能が与えられ、家の中心に婚姻関係が置かれ、婚姻が両性の愛と忠誠に基礎付けられたこと、そして父子関係が親子関係に変えられたことである。

3. 三圃場制度とその解消における所有権の態様

1) 三圃場制度と輪栽式、穀草式生産の生活様式

重量のある有輪犁、製鉄の鋤の普及は、7世紀にドイツ各地に普及した。重く湿った土地の北ヨーロッパの大半を占める土地の開墾・開拓に適した。これは冶金技術の発達に支えられたもので、重量鋤の発明と新しい繋ぎ法による馬力の導入とが農業技術の革命を起こしつつあった。12世紀頃から収穫を飛躍的に豊かにし、同時に農業社会の在り方を大きく変えた。これを「中世の農業革命」と表現する場合がある¹⁸⁾。11～2世紀頃から次第に麦の種類を変えられることで連作でも収穫量の落ちないことを知った。いわゆる「三圃場制農法」である。三圃農法は、耕地を冬畑 (秋畑) ・夏畑 (春畑) ・林耕地の三つに分け冬畑には11月の鋤返しの後、冬麦すなわちライ麦、良質小麦、スペルト小麦が播種

¹⁵⁾ I・W ケラーマン著、島光美緒子訳、前掲書 76p

¹⁶⁾ D、ラエルティオス著加来彰俊訳『ギリシャ哲学者列伝』岩波書店 157～8p (Diogenes Laertii : Vitae Philosophorum 1964)

¹⁷⁾ I・W ペーター・ブリック著服部良久訳『ドイツの巨民―平民・共同体・国家 1300～1800年』ミネルヴァ書房 193p 1989年

(Peter Blickle, Deutsche Untertanen Ein Widerspruch, 1981)

¹⁸⁾ ゲルデス著飯沼二郎訳『ドイツ農民小史』未来社 1910年

(Heinrich Gerdes Geschichte der deutschen Bauernstandes, 3. Aufl, 1928)

されて、夏畑には3月に春麦すなわち大麦や燕麦がエンドウとともに播種された。休耕地には家畜が放牧され、地味の回復が計られた。休閑とは、リービッヒ (J. von Liebig) によると放牧による施肥、雑草の鋤込み等をもって地力を回復せしめることを意味する¹⁹⁾、という。

三圃式のような経営方式は漸次的に生成発展するものであり、決して画一的になし得るところではない²⁰⁾。穀草式農法に比べて、この農法は土地の三分の二が常に耕作地として利用できるのも、能率的である。19世紀の農業革命に至るまで、西欧全体で、専らこの三圃場制の農法が行なわれていた。共同体は播種から収穫の時期まで決定できたし、森林・原野・牧場などの共同地の管理をもしており、耕作地も支配した。個人を超えた集団との連帯がある場合、彼らはみじめな生活でも我慢することができるのだ。三圃制農法の農法は、村落共同体の団結を強化した。個人を超えた集団との連帯がある場合のみ、我慢して生活することができるのである。

穀物生産と家畜飼養は地力回復や土壌改良の面で密接な関係にある。新大陸からジャガイモが輸入され、ライ麦に取って代わり、ジャガイモは三圃制農法に代表される麦畑と牧草地の交代サイクルには無関係だったが、そうした交代サイクルに割り込み、休耕地に栽培され出したのは19世紀になってからだ。この増産が進むにつれて、単なる人間の食糧としてでなく、余剰分は家畜に、特に豚のエサとして利用されるようになった。飼料作物としてクローバやカブよりもはるかに効率的だった。牧畜社会では、農耕社会と異なり、協力的で組織的であり、農耕地に保守的である。一方で社会的現象として経済的利権をめぐる対立も台頭し、封建性の崩壊の兆しともみえてくるのである²¹⁾。

イギリスでは、18世紀の農業革命によって中世以来の三圃場制による共同体中心の農業から、いまや囲い込みによって土地を集中した大地主による資本主義的大農経営に移るのである。その結果、大陸への影響も強く農業生産は大いに増加する。一方、工業における工場制度のように、農業においても地主と農業資本家と農業労働者からなる資本主義制度が確立し、伝統的な農村の生活は根底から変わってしまうのである。

2) 三圃場制度の崩壊と所有の概念

この三圃場制農法は私有地が年々移動することから農民の個人主義を捨てさせることに役立ち、自己持分領域以外の共同作業に加わるほかなかった。三圃式では農作業上の規制があった。たとえ所有権は各個人に所属する田畑であっても、一括して三区画に区分するので、共同体意識 (Gemeinde) はこの農法に影響していることが強い。近代になると、とくに休耕地にこの飼料類が栽培されだすと、家畜の舎飼いが可能になると同時に、耕地と放牧地の交替も不必要になる。それぞれの農家経営の独立性が高まり、村落共同体の紐帯はもはやゆるやかな存在となる。それに他の農家との協力関係も希薄になる。三圃場農法ではすべての農地を同時に利用できなかったうえに、均等分割の相続習慣が根

¹⁹⁾ ゲオルグ・フォン・ペロウ著 堀米庸三訳『ドイツ中世農業史』創文社 52~4p 1950年 (G. von Below, Der Deutsche Staat des Mittelalters 1908)

²⁰⁾ H. ハウスホーファー、三好正喜・祖田修訳『近代ドイツ農業史』未来社 15p 1973年

(H. Haushofer, Die Landwirtschaft im technischen Zeitalter, 1963)

²¹⁾ G. ブローム 都筑利夫訳前掲書

付いた地方では、農地は次第に細分化されていき、人口増加が拍車をかけ、土地所有の観念も強化されてきたのである。収量増大はまた地価を上げ、それに対する所有観も生じた²²⁾。

所有とは自分のものとしての獲得、という意味を離れては所有は存在しない。共同体内の自他の区別の意識行為であり、所有者としての相互認知の関係行為である。個人的な領主の会計と非個人的な会計を切り離すのも14世紀になってからである²³⁾。資本主義においては、所有は絶対である。個人主義の物質的基盤は私的所有であり、個人主義が強まれば強まるほどに私的所有も強化され、所有権を積極的に主張し続けることが社会的な義務とさえなる。所有権は有体物だけでなく時間にも行為にも行使される。私性 (privat) に対する特殊な感覚が磨き上げられている。ドイツ経済の伝統主義を支える柱は、家計と職業 (Beruf) との対応、つまり世襲制なのだが、これを生み出すのは他ならぬ個人主義なのである。個人主義が強まれば強まるほどに他人に対する関心は弱くなる。それは職業選択に関しては少数の特定職種への社会的関心の集中を妨げる結果を生む。個人の側から見れば職種の価値に任意性が強まる。親の職業を選びやすくさせる皮肉な結果となる²⁴⁾。

新大陸の発見は、経済的には毛織物工業を発展させ、政治的には統一的な中央集権の確立に向かわせた。毛織物工業には、原料としての羊毛と、工場労働者たる都市住民のための食料としての羊肉の大量生産が要求される。貨幣経済も浸透し、農業生産の個人主義化が促進される。放牧場や採草地の独占的な土地支配の方式が形成された。経済生活の単位が家計であり、家計は生産要素の供給を通じて所得を獲得し消費する。家族構成員の生活はその所得の獲得と消費とによって生計が維持される。家族が苦難に遭遇した時には自己の努力で、または外部の手で生活維持のための財・用役が提供されて、社会的な生活水準を維持する。荘園制が解体し、三圃式経営の古い経営方式がそのいっさいの制約的経済条件とともに解体した後、ヨーロッパ農業は何世紀以来はじめて独立自衛の個別経営となり、経営組織や運営に関してそれぞれの自然的・経済的立地条件に適応する可能性を与えられた。農業経済の構造形態の変化に決定的であったのは、農業外の国民経済の構造変化であった、といえるのである²⁵⁾。

4. 農業資本主義と個別農業経営の自立衝動

1) ドイツ産業資本主義の個別農業経営と合理化思考

19世紀中葉頃より農業技術の改良、経営の集約化が、従来の生活体系に破壊的作用を及ぼしてきた。ヨーロッパでは農業労働がもともと単純化され、個人による技術差もなく、打穀機械の導入や集約的な甜菜栽培の普及により、穀物生産の比重を低下させるようになった。徒弟人などは進歩した農業経営に適合しなくなり、純粋に貨幣を受け取る自由な労働者や季節労働者が増加してきた。伝統的な家

²²⁾ 榎川一郎著前掲書 241p

²³⁾ G, サートン著平田実訳『古代中世科学文化史Ⅳ』岩波書店 p216、1957年 (Introduction to the History of Science Volume III, Part I by George Sarton)

²⁴⁾ M, ミッテラウアー著若尾裕司・服部良久・森明子・肥前栄一・森謙二訳『歴史人類学の家族研究』371～2p 1994年、新曜社 (Michael Mitterauer, HISTORISCHE-ANTHROPOLOGISCHE FAMILIENFORSCHUNG, 1990)

²⁵⁾ ブローム著 都筑利夫訳 前掲書 37p

父長的関係が破壊されてきたのである²⁶⁾。同時に労働義務、職業義務、個人的精神的な人生観がプロテスタンティズムによって促進され、ここから経済的労働の増進も同時に生じた。この労働の評価が資本主義精神を作り出し、所有権の歴史的な源泉と倫理的な根拠は労働にほかならない²⁷⁾。プロテスタント的な文化の形成は、比較的最も多く特異性を獲得したのは家族である。生存手段を生産し教育の課題を担う家計というものは第一に最も手近な召命としてキリスト教的職業の中心的意義を獲得した²⁸⁾。すべての人間関係は富を得ようとし、個人は自己中心主義に志向し、自分もまた他人と同様に、自分にとって利用すべきものとなったのである。

近代科学を支えてきたのは合理性とか実証性であり、その実証的な経験的な傾向の強いイギリスと合理主義的傾向の強い大陸との間に差異がある。とりわけ合理的農業という場合には、自然科学的合理性および経済的合理性を問題にせざるを得ないように、自然科学と社会科学、とりわけ経済学という二つの異なる科学による基礎づけをもって成立するものといわなければならない²⁹⁾。

西ヨーロッパには気象条件が安定しているから自然の在り方も数量化できる。つまりテア (Thear e) の合理的農業観もあって、自然の全体像を合理的に計量して、これを操作しようとする。農業社会から産業社会へ移行させるのは工業化であり、この工業化が社会構造や人々の生活意識に、とりわけ、都市生活者へどのような変化を生じさせるか、である。都市への人口集中、大規模組織の出現、科学技術の発展、大量生産・消費へと収斂する。貨幣経済が浸透するに及んで、農業生産における個人主義が台頭し独占的な土地支配が成立してきた³⁰⁾。

人間の経済活動のエネルギー源泉は、家族或いは共同体から再生産のエネルギーから得られる。19世紀は市民階級の世紀であり、伝統的な農業制度が必然的に伴っていた諸々の制約も除去され、営業の自由と市場経済が確立されなければならなかった。農業経営にとって、世代の交代は重大な意義を有している。それは相続も現物分割により、農場にとって大きな危険をもたらすこともあり得るからである。ドイツは唯一の相続人に農場を不分割的に承継させる一子相続慣習は、中世後期以来ドイツの多くの地方で発展し、今日まで存続し続けている³¹⁾。西洋の合理性は、人間の労働を用具に肩代りさせ、人間を楽にさせる態度が合理的であった。個人が自分の利益を追求して行動し、しかも手に入る情報を利用しながら自分の意見を修正し、あるいは固めて行くのも合理的行動である³²⁾。

2) 農業生産の場と生活の場の認識と貨幣価値計算

中世の教会が墮落したとき修道院運動が起こり、修道院は、禁欲、服従、清貧、貞潔を理想とした。

²⁶⁾ M. ヴェーバー著山口和男訳『農業労働制度』未来社112p、1959年 (Schriften des Vereins zur Sozialpolitik Bd. 58, 1893, S62~S56, Referrat von Weber, 1924)

²⁷⁾ イェーリング著村上淳一訳『権利のための闘争』岩波文庫60~1p、1982年 (Rudolf von Jhering, Der Kampf um's Recht 1894)

²⁸⁾ M. ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店109p、1989

(Max Weber., Die protestantische Ethik und Geist der Kapitalismus, Tübingen 1920)

²⁹⁾ 椎名重明著『プロテスタンティズムと資本主義』東京大学出版会59p、1996年

³⁰⁾ V. クレム編大藪輝夫・村田武訳『ドイツ農業史』大月書店、11~2p、1980年 (V. Klrmm ; Agrargeschichte von den burgerlichen Agrarreformen zur sozialistischen Landwirtschaft in der DDR)

³¹⁾ K. クレッシュネル、W. ヴィングラウ著 田山輝明監訳『西ドイツの農家相続—法制度の歴史と現状—』成文堂、2~3p、1984年 (Karl Kroeschll/Wolfgang Winkler Landdwirtschaftes Erbrecht in der BRD 1984)

³²⁾ M. ヴェーバー著、大塚久雄訳、前掲書49p

しかし、カルヴァン (Calvin) は「世間の中にいて」働くことで職業というものを神聖視する。彼の職業倫理、合理精神は市民階級に歓迎され近代資本主義へとつながってくる。聖書にみる「すべての虚しい言葉」というのは、無駄話の厳禁をも目的達成に役立て、そうした性格の根拠を一つには資本主義の「計算的精神」calculating spiritに求めたし、ゾンバルト (Sombart, W) は資本主義の本質的な要因として「計算癖」Rechenhaftigkeitを経済のための一つの手段から全生活態度の原理にまで変化させたきたという³³⁾。厳密な計数的予測の基礎の上にすべてを合理化し、経済的成果を目標として計画的かつ冷徹に実行に移して行くことが、資本主義的私経済の特徴の一つになっている。

資本主義経済の下ではあらゆる生産物が商品になり、農業生産にも個人主義化が促進される。資本主義経済では人も物も経済合理性の中でとらえられ、「人間も物も計算可能性の視角」からとらえられ、数量化し得ないものは存在しない。事物の量的あるいは数量化的方法による自然認識の発達、近代化における科学の発展に貢献し、その科学的認識は、事物の質的な差別を量的に還元し、これを貨幣数値的に提示するところにある。長い間農村共同体における生産と生活を支えてきたバランスが、人口増加と貨幣経済の圧力によって徐々に「農業生産の場と生活の場との区分に向かって崩れてゆく」のである。

資本主義は、生産中心主義のシステムであって商業は生産体系に依存している。ブレンターノ (L. Brentano) は、資本主義は利潤追求是認の経済から最大限の利潤を獲得しようとする努力へ駆り立てる精神、むしろ貧欲、それこそが資本主義精神の本質なのだ、という³⁴⁾。またM・ヴェーバーによると、資本主義の精神の担い手は資本家であり、労働者であり、また農民や、職人たちも入ってくる。近代の資本主義の土台をなす産業経営と合理的組織を作り上げたのが一つの特有なエートスという。リスト (F. List) は、農・工・商の調和を重視するリストの経済学体系は、今日、開発途上国にとっての政策的指針となっている³⁵⁾。

生物体としての生命は、生きている部分の総計以上のものであり、部分の関係があって組織的な相互関係と全体の保持があれば有機体である。個別の農業経済主体の多種の財産構成要素が一つの目的のために利用、処分されるということになってくると、これらの財産の全体は、有機的に編成された集団をなすようになる。この統一体として財産を把握しようとするれば、財産を統一的な価値によって記録計算しなければならない。そこで全財産は経済主体の元金以上の意味を持ってくる。ここに「純収益の把握」を「資本価値計算によって」の道程が示唆される。オーウイン (Chales Stewart Orwin) は、「実際の必要から始められた農場の経済計算は、彼を農業における原価計算および簿記の研究へ向かわせ」、農業経済の問題も数値的なデーターを駆使して解決されることを主張した。農業の経済計算を重視したのである。オーウインの特に生産費計算の努力は農業生産に従事する者への諸施策に有効な働きを見せ³⁶⁾、それがイギリスにおける家族経営の生活向上に計り知れない影響を与えたの

³³⁾ M. ウェーバー著前掲書 297p

³⁴⁾ L. ブレンターノ著 舟越康寿訳『歐羅古代経済史概説』日本評論社 223~4p 1944年
(Lujo Brentano: Das Wirtschaftsleben den antiken welt 1929)

³⁵⁾ F. リスト著 小林昇訳『農地制度論』岩波書店、p53, 71, 1973年 (Friedrich List Die Ackerverfassung, Die Zwergwirtschaft und Die Auswanderung 1842)

³⁶⁾ C・S・オーウイン著三澤嶺郎訳『イギリス農業発達史』お茶の水書房刊 p6, 1978年

である。家政学としてのエコノミーが本来の意味を喪失し、現在のような「経済活動」を意味するようになり、「家」の変容が開始されたのであった。家の自律性の喪失、生産と消費の場としての家から消費の場としての家庭への変容こそ、19世紀に全般的に出現した現象であった。

5. 農家経済の消費経済体と生産経済体

1) 「生計維持」の家計と「生産経済」の経営計算

家族が住む家の概念が、最も早く具体化されたのは、居住者全員が自発的に協力し合って、家父の指導の下で生活し、働く農業経済においてであった³⁷⁾。だが、家族が持っていた諸機能は経済的にも、宗教的にも分化し、独立した専門職となり、有機的に機能するように社会的に仕組みられてきている。家それ自体が、客観的な存在として独自の意味を持ち、糧を作り出す農家経済は物化された経営体として認識され、その構成員は経営体を責任もって運営する責務を持ち、農家の継承性を維持するための最適な管理方式を持つように思考するのである。

家計は経済理論上の主体概念であり、相互扶助の機能を持ち家族構成員の生計維持のために欲望が充実され、そのために財貨が消費されると理解されている。生計を維持する収支計算と合理的貨幣計算との原理的対立において、家の「経済」は、「経営」によって区分され、そこには消費機能のみを留める家計が残り、労働共同体の性格を私的共同体が家族として登場してくる。19世紀において分離工程が急速に開始し、人口増加、機械技術の発展、近代交通手段の改良、農民解放および営業の自由などの経済生活の法的基礎の変化などが、この重要な原動力と認められる。テニエンス (Tönnies, F) は、この事情をして人間の結合的なものの在り方を二分してゲマインシャフトとゲゼルシャフトとした。そして家はゲマインシャフトの代表であり、ゲゼルシャフトでは会社が代表的なものである。ゲマインシャフトは人間の自然的な感情の流露によって結び付いた一体性をもち、ゲゼルシャフトは利己心・打算・比較考量に基づき契約・協約・定款によって結合している³⁸⁾。

営利企業が所有者から独立して行く過程で決定的意義をもった事情は、第一に、資本調達が必要から非家族的構成員を加えた共同体が構成され、それによって計算の上で「営業上の計算」と「家計の計算」の会計帳簿上の分離が必然化し、家族共同体内の連帯強化はなく経営財産への分離、そして人的構成から物的構成に転化する³⁹⁾。

1872年はドイツ農業簿記誕生の年といわれる⁴⁰⁾。これ以降のドイツ農業の発展において、とりわけ、個別農業経営の農業生産技術と経営管理方法において、指導的な役割を果たしてきたのが、通称「DLG」と呼ばれるドイツ農業協会 (Deutsche Landwirtschafts gesellschaft, DLG) である。この団体の活動は営業経営に肥料・飼料の研究、種子の検定、農機具の試験と検定などを通じて農民に生産

(C. S. ORWIN : A HISTORY OF ENGLISH FARMING 1949)

³⁷⁾ I. W. クラーマン著 鳥光美緒子訳 前掲書 p86

³⁸⁾ F. テニエンス著杉原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波書店 p111

(F. Tönnies. Gemeinschaft und Gesellschaft 1926)

³⁹⁾ 江頭憲治郎著『会社法人格否認の法理—小規模会社と親会社に関する基礎研究—』東京大学出版界 134~5p1980 年

⁴⁰⁾ J. ナウ著 矢島 武編訳『農業経営学の系譜』明文書房1972、23p (Joosse Nöu, Studies in the Development of Agricultural Economics in Europe, 1967)

技術について新知識と技術指導を行なってきたが、農家経営の消費経済 (Aufwandswirtschaft) と営利経済 (Erwerbswirtschaft) の明確な観念的分離を前提に、農業経営の簿記の記帳指導によって財産構成要素のその有機的関連から純収益計算、財産計算、生産費計算などを各自で算出できるように指導して、「農業者も企業家である」とし、ドイツ農業における個別経済体の発展に計り知れない活力を与えるものとなった⁴¹⁾。DLGの積極的な活動の背景となるものに、イギリスに遅れて1870年頃に始まるドイツ農業の資本主義化が進み、比較的大規模な農業経営には大いに役立った業績を残したものであった。ヨーロッパにおける所有ということを考える場合、私有財産といわれているのは個人の財産ではなく、家父長制家族の財産である。だからこそ相続による蓄積が可能で継承性があるといえる。

2) 一戸一法人、一人会社、藁人形などの制度的論争

生産と消費の分離、経営と家計の分離こそ、資本主義の起点であり、家計が消費経済と切り放されることによって農家経営が生産組織の経営体として自立し、合理的な発展を遂げて行かざるを得なくなったところに近代社会の特質がある。生産組織の『企業それ自体』は企業主 (Unternehmer) に対立して、企業そのものが、つまり経営そのものが存在するという考え方である⁴²⁾。だが、人間の労働は人間自身から未分離であるし、一家族内での長、父、親族の内として労働し、生産する。共同出資者が多人数になってくると経済活動が煩雑になってくる。そこで一定の基準をみたした共同経営にはその出資者一人一人とは独立した権利義務の主体性を認める法律制度が導入されるようになる⁴³⁾。日本では歴史的に儒教圏にあり、家族、宗族の中で個人が位置づけられており、また家は血縁を中心とした家族の生活共同体であり、消費の単位であると同時に協同体であり、家計と経営の協同体であった。ヨーロッパでは農業労働が合理的な考え方として「計算可能な量的な思考」であり、「家計の原理」は、能力に応じて貢献し必要に応じて取るのであり、「経営」の原理は人的物的手段を特定目的のために「会計的帳簿的」かつ「法律的」に家計から切り放して持続的に運用し得るのである⁴⁴⁾。

資本主義は個人の責任を問い、危険も成功もすべて自己自身のものとする。個人の努力で、成功するもし、経済的に独立することも可能になり、稼得の財産が家柄や階級よりも強力なものとなった。今日、女性が日本農業の作業を大きく支えており、家計と経営の分離が、農村の現実生活にどのようにして分離基準を持つのか、東南アジアの儒教的家族意識の中で生起する分離思考は大きな内部矛盾が張り込んでいる。

ウエーバーのプロテスタンティズムの倫理観から若干考察してみると、近代資本主義が成立するにはいくつかの前提条件が必要であった。それは、彼によると、家政と経営の分離であり、合理的簿記であり、経済活動全体が合理的な法と行政に支えられ、計算可能となることも必要であった。その合

⁴¹⁾ Veröffentlichungen des Königl. Preussischen Landes - Oekonomie - Kollegiums. Landwirtschaftliche Steuer - und Buchführungsfragen. p17, Heft2, 1910, Berlin.

⁴²⁾ 山根忠恕著『アメリカ財務会計』中央経済者 1955、186p

⁴³⁾ 岩井克人著「ヒト、モノ、法人」76～8p

『現代思想』青土社 1990 年 vol. 18, 9 号

⁴⁴⁾ 若尾裕司著『ドイツ奉公人の社会史—近代家族の成立—』ミネルヴァ書房 p17

理的生活態度は「プロテスタンティズムの倫理」はしだいに宗教的な価値を失い「資本主義の精神」となる、というのである。そこでわれわれはその論理的展開の上で、一戸一法人を考え、ドイツの「一人会社」「藁人形Strohmanngründung」、そして「アメリカの発起人一名のみで会社」を認める単独の計算をも考えられ、国民経済的に害のない形成物として積極的受容も考慮されてきたのである⁴⁵⁾。

19世紀における科学技術のめざましい発達、人々の目を現実の物質的世界に向けさせ、1859年に発表されたダーウインの『種の起源』は、唯物主義的傾向を更に強化した。またリストの生産力とは、農・工・商業の継続的な調和的・均衡的発達が目標として掲げられもした。それは分業論に強い質的要素を導入させなければならない⁴⁶⁾。家族の機能は、その形態同様、時代や文化によってさまざまである。ある時には家族は経済的生産単位であり、ドイツでいう「心なごむ」いわゆるゲミュートリッヒ (gemütlich) の場である。しかし、現代では多くの機能集団が取って代わってきている。プロテスタントでも資本主義でも、集団よりも個人が主要な単位となり、純粋な信仰の代わりに個人的な利潤が活動の原動力となった。宗教と経済の領域において、慣習や伝統の衰退が起こり、共同体との連関から開放された個人的な目標が人々の意識を支配するも、なお基盤としての農家経営は存在するのである。

6. おわりに

会計は文明の進歩と手を携えてきた。人の財産は、その所有家畜の頭数を数えることではかられた時代で、その起源はエジプト、バビロニアの会計に遡りうる⁴⁷⁾。中世では帳簿の随所にみられる「神と利益の御名にて」の表現は、徹底的な利潤追求を意味するのではなく、教会教義の許容する範囲での利益を認めるものである。教会法によると、商業は貧欲、詐欺、高利の誘惑に満ちていて、罪惡視されてきたが、やがて緩和され、家計を助け、貧民を助け、国外から国内需要品をもたらすものであれば適度の利益は正当化されたのである⁴⁸⁾。ドイツで目的の不明確な多義的な家計から一定額の財産が分離されて、明確な営利目的のための元本 (Stammkapital) とされる、ということによって農業経営において価値計算がなしとげられるのは19世紀に入ってからである⁴⁹⁾。

営利企業が所有者・構成員から独立していく過程は、資本調達が必要から、また宗教的個人主義意識の援用もあって、非家族的構成員を加えた共同経営の中で、「経営の領域」と「家計維持の領域」の会計帳簿上の分離が必然的取引に当たっての信用力の創出の必要であり、従来の家族共同体内での連帯強化ではなく、物的会社に変化して理論的に構築化されてきたのである。

家族経営を基盤とする農業経営は貨幣数値的に掌握することで銘記されるべきことは、経済取引から個別経営の保有する財産に増減変化を生起させた会計事実はそのすべてが記帳対象になれるものではな

⁴⁵⁾ 江頭憲二郎著 前掲書、52～3p

⁴⁶⁾ F. リスト著 小林昇訳 前掲書 71～3p

⁴⁷⁾ A. H. ウルフ著 片岡義雄訳『ウルフ古代会計史』中央経済社 1～5p 1954年 (Arthur H. Woolf: A Short History of Accountants and Accountancy 1912, London)

⁴⁸⁾ 佐藤彰一著『修道院と農民—会計文書から見た中世形成期—』1997年 名古屋大学出版 645～53 参照

⁴⁹⁾ I. W. ケラーマン著 鳥光美緒子訳前掲書 8p

い。シュマーレンバッハ (E. Schmalenbach) が指摘するように、内部取引が多く、結合経営 (verkoppler Betrieb) の多い農家経営では生産と消費の厳密な区分の壁を知るのである⁵⁰⁾。それでも今日では経営と家計の間の合理的な客観的な事実関係を基礎に組み立てられ、そのための規則が必要である。例えば、客観的事実認定を基礎に、必要経費の家計と経営の配分規定とか、家計と経営の報酬区分の規定、車両運搬具などの減価償却の経営賦課と期間配分などである。

わが国の新農政では農業経営の法人化を推進する施策がなされてきた。「経営体」の成立は成員、特に資本主ないし経営主の人格から観念的に独立した経営体の成立を意味するものである。しかし、家計と経営の分離、その意味での経営体の成立、ないしせいぜい、資本体の成立を意味するにすぎず、所有者個人の私有財産からの解放を意味するものであっても「会計主体の確立」の性質であるように思える。家族経営を基盤として個別経営体を核として据えるにしても、資本は職能概念であり、事物概念ではない。帳簿上の区分とは概念上の区分である、このことは農業法人化促進に際して銘記されねばならない。

(あさの ゆきお)

⁵⁰⁾ E・Schmalenbach : Dynamische Bilanz, - Das Landwirtschaftliche Rechnungswesen, - 1931, 48p, Auf 15.